蜜柑

芥川 龍之介

ある曇った冬の日暮れである。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下ろして、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電灯のついた客車の中には、珍しく私の他に一人も乗客はいなかった。外をのぞくと、薄暗いプラットフォオムにも、今日は珍しく見送りの人影さえあとを絶って、ただ、おりに入れられた小犬が一匹、ときどき悲しそうに、ほえたてていた。これらはそのときの私の心持ちと、不思議なくらい似つかわしい景色だった。私の頭の中にはいいようのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落としていた。私は外套のポッケットへじっと両手を突っ込んだまま、そこに入っている夕刊を出して見ようという元気さえ起こらなかった。

が、やがて発車の笛が鳴った。私はかすかな心のくつろぎを感じながら、後ろの窓枠へ頭をもたせて、目の前の停車場がずるずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたたましい日和げたの音が、改札口の方から聞こえだしたと思うと、まもなく車掌の何か言い罵る声とともに、私の乗っている二等室の戸ががらりと開いて、十三、四の小娘が一人、慌ただしく中へ入ってきた、と同時に一つずしりと揺れて、おもむろに汽車は動きだした。一本ずつ目を区切ってゆくプラットフォオムの柱、置き忘れたような運水車、

1 【横須賀】神奈川県の南東部にある都市。
1 【二等客車】鉄道の客車の等級の一つ。当時は三つの等級に分けられていた。
3 【プラットフォオム】プラットフォーム。
7 【外套】雨や風を防ぐために洋服の上に着る衣服。
7 【ポッケット】ポケット。
10 【もたせる】寄せかける。
10 【停車場】「駅」の古い言い方。
11 【日和げた】晴れたときに履く歯の低いげた。
14 【運水車】荷台に水槽が設置された、水を運ぶための車両。
左1 【祝儀】ここでは、サービスに対する礼としてあげるお金。チップ。
左1 【赤帽】駅で客の荷物を運ぶ人。赤い帽子をかぶっていた。

それから車内の誰かに祝儀の礼を言っている赤帽――そういう全ては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後ろへ倒れていった。私はようやくほっとした心持ちになって、巻きたばこに火をつけながら、初めてもの憂いまぶたを上げて、前の席に腰を下ろしていた小娘の顔を一瞥した。

それは油気のない髪をひっつめの銀杏返しに結って、横なでの痕のあるひびだらけの両頬を気持ちの悪いほど赤くほてらせた、いかにも田舎者らしい娘だった。しかもあかじみた萌黄色の毛糸の襟巻きがだらりと垂れ下がった膝の上には、大きなふろしき包みがあった。そのまた包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかり握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかった。それから彼女の服装が不潔なのもやはり不快だった。最後にその二等と三等との区別さえもわきまえない愚鈍な心が腹立たしかった。だから巻き煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいという心持ちもあって、今度はポッケットの夕刊を漫然と膝の上に広げて見た。するとそのとき夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電灯の光に変わって、刷りの悪い何欄かの活字が意外なくらい鮮やかに私の目の前へ浮かんできた。いうまでもなく汽車は今、横須賀線に多いトンネルの最初のそれへ入ったのである。

しかしその電灯の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間は余りに平凡なできごとばかりでもちきっていた。講和問題、新婦新郎、涜職事件、死亡広告――私はトンネルへ入った一瞬間、汽車の走っている方向が逆になったような錯覚を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へほとんど機械的に目を通した。が、その間ももちろんあの小娘が、あたかも卑俗な現実を人間にしたような面持ちで、私の前に座っていることを絶えず意識せずにはいられなかった。このトンネルの中の汽車と、この田舎者の小娘と、

1 【煤煙】石炭などを燃やしたときに発生する、すすや煙。
2 【巻きたばこ】紙で巻いたたばこ。
4 【一瞥】ちらりと見ること。
5 【銀杏返し】頭の上で束ねた髪を二つに分け、左右で輪の形にして結ぶ髪型。
6 【萌黄色】黄色を帯びた緑色。
7 【襟巻き】寒さを防いだり、飾りにするために首に巻くもの。マフラー。
8 【赤切符】三等客車の切符のこと。当時は、客車によって切符の色が違っていた。
16 【講和問題】一九一八年十一月に休戦した第一次世界大戦の講和問題のこと。
16 【涜職事件】汚職事件。
16 【死亡広告】掲載料を支払って新聞に載せる訃報。
18 【索漠】心が満たされず、なんとなく寂しいこと。
19 【卑俗】下品でいやしいこと。

そうしてまたこの平凡な記事にうずまっている夕刊と、――これが象徴でなくて何であろう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であろう。私は一切がくだらなくなって、読みかけた夕刊を放り出すと、また窓枠に頭をもたせながら、死んだように目をつぶって、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎたあとであった。ふと何かに脅かされたような心持ちがして、思わずあたりを見回すと、いつのまにか例の小娘が、向こう側から席を私の隣へ移して、しきりに窓を開けようとしている。が、重いガラス戸はなかなか思うように上がらないらしい。あのひびだらけの頬はいよいよ赤くなって、ときどき鼻をすすり込む音が、小さな息の切れる声と一緒に、せわしなく耳へ入ってくる。これはもちろん私にも、幾分ながら同情をひくに足るものには相違なかった。しかし汽車が今まさにトンネルの口へさしかかろうとしていることは、暮色の中に枯れ草ばかり明るい両側の山腹が、間近く窓側に迫ってきたのでも、すぐに合点のいくことであった。にもかかわらずこの小娘は、わざわざ閉めてある窓の戸を下ろそうとする、――その理由が私には飲み込めなかった。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれだとしか考えられなかった。だから私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手がガラス戸をもたげようとして悪戦苦闘する様子を、まるでそれが永久に成功しないことでも祈るような冷酷な目で眺めていた。するとまもなくすさまじい音をはためかせて、汽車がトンネルへなだれこむと同時に、小娘の開けようとしたガラス戸は、とうとうばたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、すすを溶かしたようなどす黒い空気が、にわかに息苦しい煙になって、濛々と車内へみなぎりだした。元来咽喉を害していた私は、ハンケチを顔に当てる暇さえなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、ほとんど息もつけないほどせきこまなければならなかった。が、小娘は私に頓着する気色も見えず、窓から外へ首を伸ばして、闇を吹く風に銀杏返しのびんの毛をそよがせながら、じっと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電灯の光との中に眺めたとき、もう窓の外がみるみる明るくなって、そこから土の匂いや枯れ草の匂いや水の匂いが冷ややかに流れ込んでこなかったなら、ようやくせきやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、また元のとおり窓の戸を閉めさせたのに相違なかったのである。

汽車はその時分には、もう安々とトンネルを滑り抜けて、枯れ草の山と山との間に挟まれた、ある貧しい町外れの踏切に通りかかっていた。踏切の近くには、いずれもみすぼらしいわら屋根や瓦屋根がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切番が振るのであろう、ただ一旒の薄白い旗がもの憂げに暮色を揺すっていた。やっとトンネルを出たと思う――そのときその蕭索とした踏切の柵の向こうに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。彼らは皆、この曇天に押しすくめられたかと思うほど、そろって背が低かった。そうしてこの町外れの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を上げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、なんとも意味のわからない喚声を一生懸命にほとばしらせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつと伸ばして、勢いよく左右に振ったと思うと、たちまち心を躍らすばかり暖かな日の色に染まっている蜜柑がおよそ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降ってきた。私は思わず息を飲んだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴こうとしている小娘は、その懐に蔵していた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切まで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

19【ハンケチ】「ハンケチーフ」を略した言い方。ハンカチ。

2【びん】髪の毛のこめかみから耳の上にかけての部分。
9【踏切番】列車が踏切を通過する際、遮断機を上げ下げする係。
9【旒】旗を数える際の単位。
10【蕭索】もの寂しい様子。
11【目白押し】多人数が込み合って並んでいる様子。
13【陰惨】明るさや温かさがなく、やりきれない様子。
14【喚声】興奮したときなどにあげる叫び声。
18【刹那】非常に短い時間。瞬間。
19【奉公】主人に仕えること。
19【顆】果物などを数える際の単位。

暮色を帯びた町外れの踏切と、小鳥のように声をあげた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落する鮮やかな蜜柑の色と――全ては汽車の窓の外に、またたく暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、せつないほどはっきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、あるえたいの知れない朗らかな心持ちがわき上がってくるのを意識した。私は昂然と頭を上げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘はいつかもう私の前の席に帰って、あいかわらずひびだらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻きにうずめながら、大きなふろしき包みを抱えた手に、しっかりと三等切符を握っている。……

私はこのとき初めて、いいようのない疲労と倦怠とを、そうしてまた不可解な、下等な、退屈な人生を僅かに忘れることができたのである。

〈出典『芥川龍之介全集 3』（筑摩書房、一九八六年）〉

【著者】芥川 龍之介（あくたがわ りゅうのすけ）
一八九二（明治二五）年―一九二七（昭和二）年
作家。東京都の生まれ。
【著書】『羅生門』『蜘蛛の糸』『蜜柑』など

5

4 【昂然】気持ちがたかぶる様子。

③